

末黒野

すぐろの

1月号 (通巻773号)



待宵

小川玉泉

ゆりの木の鮫肌の幹秋儺雨
待宵の月まだ白く夕烏
待宵の月を確かめ門を閉づ
小恙の妻拝みぬ今日の月

家苞の柝の実拾ふ湖畔かな
時々は風に流され赤とんぼ
雲形の四国に似たり秋深む
味噌汁のひと味噌しぬ干芋茎
紅芙蓉よりも紅濃く酔芙蓉
洗はれて煌めく笹の貝割菜
藁塚に日のぬくもりや十三夜
もみぢかつ散り駅前の大けやき

京都・大原行

松本三千夫

大原やコスモスへ川音潜め

大原女の畑には居らず曼珠沙華

半蔀寂光院三句上げ内陣明し新松子

哀史語るひとと眼の合ふ堂冷えて

身に入むや大原御幸の松枯れて

虹の間三千院二句の日の嫋やかにそぞろ寒

大原の呂川律川秋の声

秋冷金福寺三句の京一望や蕪村墓地

冷やかや蕪村下絵の硯箱

爽やかや蕪村の描ける芭蕉像

寺苑高桐院二句冷ゆ真一文字の石畳

ガラシャ夫人の墓は燈籠冷え集め

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

鴉

田中臥石

わだつみの祭夜寒の灯を仰ぐ
落雷の火柱立てり秋祭
秋冷の燈の灯澄の影落す
林中の秋の蔚や日除け帽
蒼穹や秋風通ふ山武杉
海霧濡れの朝の街道秋桜
一陣の風のコスモス鼬跳ぶ
師の声の突と聞こゆる鴉の空
家前の松の林や茸狩
茸飯食めり玻璃透く海の音

茶立虫

小野口正江



留守の間の仏壇にある栗ごはん
半熟の卵にならぬ寒露かな
ゆつたりの靴の注文万年青の実
ほととぎす咲くや曇りし後の月
髪乾くまでを栗むく誰が来るか
木犀をやり過したる匂ひかな
行く秋や天守の下の味の店
神無月夫の知らない小田原井
肉まんを頬ばつてゐるえびす講
友二先生の色紙掲げる
霜降や友二師の句の茶立虫

大花野

清海信子

朝明けや帰燕の一つづつ見ゆる
高階の一鉢の土ちちろ鳴く
たれかれを招く尾花の寺を出づ
湖畔径ゆくに秋風まへうしろ
初鴨とおぼしき数の浮く湖心
かざす手に血の色透けて鴝日和
女教師の声凜々と花野径
とりどりの草ひびき合ふ大花野
口中に香の広がりぬラ・フランス
稲刈つてしたたり落つる日を負へり

祝樽

黒滝志麻子

足裏を波の引きゆく厄日かな
重陽や仲見世の灯のつぶらなる
小鳥来る薬師寺に積む祝樽
秋澄むや楽の音に開く朱雀門
二月堂しかと閉ざされ薄紅葉
秋燕の群れ飛ぶひかり羽田沖
肌荒き山峙てり鴝の晴
色鳥や崖の真下の荒磯波
神の鶏色なき風に刻を告げ
容赦なく捨つるもの捨て夜長の灯

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

ふる里 松田 泰子

すがれ虫 森清 信子

泣かされし子はもう駆けて鳳仙花
ふる里も昨日も遠き銀河かな
団栗を見ればいまだに拾ひけり
新涼や診察券の一つ増ゆ
芦の湖の底の暗くて曼珠沙華
月光がレールを磨く過疎の町
闇に目を馴らして虫の世を覗く

巖深き海蝕の崖秋の航
名月や仙石原を渡る風
見る程に眼の乾き曼珠沙華
夕茜小鷺の翔てる稲架襖
隠岐の夜の流人めきたりすがれ虫
潮騒の他なき島や天の川
鳥渡る船改装のレストラン



青炎集

小川玉泉選



横浜

占部美弥子

横浜

重田修

馬事公苑飼葉に潜む昼ちちろ
白秋の彩際立たず常夜灯

破れ蓮の力抜かざるものは立つ
寺苑より展けて秋の由比ヶ浜
静けさや骨董店の秋灯
秋の滝返り見るときやさしかり

鎌倉

福田房子

横浜

伊藤敦子

秋雲の影の走るや湖の面
日の暮の迫る谷戸道吾亦紅
湖静か今宵の月の影浮かべ
芒原歩むや沈みゆくごとく
敗荷のあはひに動き鯉の影
ジンジャーの香り仄かや闇迫る

鈴生りの柿や国勢調査の日
満月や吃水深き油送船
露天湯に己れ独りや山の秋
月光や刃するどき裏妙義
蹲踞に寄り添ふ馬酔木紅葉せる
寂光院の鐘の余韻や夕芒

障子貼り明るき影の生れけり
躓きし石ふりかへる秋の暮
約束の花種採りて人を待つ
亡き夫のスケッチブック秋灯下
秋澄むや寶銭箱へ音一つ
三歳児兄となる日や天高し

横浜 太田良一

黒焦げの秋刀魚の骨の白さかな

鈴が森刑場跡や秋時雨

ことさらに異変なき日々新豆腐

名月に凡愚の五欲捨てにけり

虫しぐれ指揮者ゐるごと瞬時止む

無縁なる遊女の塚や曼珠沙華

横浜 新堀満寿美

酔へばもう新酒も古酒も無き親族

秋の蚊の存外しかと刺しにけり

実を四方に零して榎の大樹かな

一会なる人と榎の実拾ひけり

一陣の風の無情や萩の花

穂薄に風筋しかと在りにけり

横浜 加藤八重子

あてもなく出て木犀の風に会ふ

無花果の当り年なり持て成さる

おんぶばつた小さき影を背に跳ぶ

望郷の念捨てきれず月今宵一

月澄むや我が人生に悔いのなし

言ひたきを忍の一字やちちる鳴く

横浜 村井一之

さやけしや甘き香りの玉露汲む

秋の気を吸ひ込む如く鯉の口

にぎはしく雀の遊ぶ刈田かな

山間の刈田をすべる日差しかな

翁の手の豆食む鳩や秋うらら

蜻蛉釣る園児の駆くる野原かな

千葉 亀卦川菊枝

斧かざす蟻螂の眼の動きけり

霧深き瀬音に蹤きてくだりけり

佇めば吾も山姥芒原

木犀の香の移りをり庭箒

雨脚の萩を散らしてしまひけり

月代の散歩むかふも夫婦連

横浜 浅川幸代

本堂は入母屋造り萩真白

大庫裡の暗き榎やちちるなく

古里の変らぬ土間やちちるなく

違ひ棚秋草小さく活けてあり

半丁でこと足りにけり新豆腐

誰となく声をかけたき月の道

巨林抄

純 白 の 孤 高 極 ま り 芙 蓉 閉 づ	コ ス モ ス の 捉 へ し 風 の 軽 さ か な	風 誘 ふ 籠 に 活 け た り 秋 桜	朝 霧 の 橋 を 夜 霧 に 帰 り け り	青 空 へ 刈 込 み の 音 爽 や か に	鱚 雲 気 の 向 く ま ま の 万 歩 計	朝 露 に 宿 る 日 の 色 草 の 色	行 く 秋 や 風 の 色 に も 心 急 き	水 切 り の 石 投 げ て 絶 つ 秋 思 か な	堤 防 の 大 足 小 足 は ぜ 日 和	一 村 の そ つ く り 柿 の 色 と な る	食 べ き つ て 骨 美 し き 秋 刀 魚 描 く
吉 田 美 智 子	塚 越 弥 栄 子	鈴 木 芙 蓉	鈴 木 俊 孝	内 田 三 郎	倉 内 和 子	及 川 照 子	今 村 千 年	山 崎 幸 夫	梅 田 武	竹 村 清 繁	中 島 ひ ろ し